



谷崎潤一郎の「朧(マンジ)」における文体的特徴について(一) : 越境者の聞いた「大阪語」

湯浅, 英男

(Citation)

近代, 95:149-181

(Issue Date)

2005-09

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD0I)

<https://doi.org/10.24546/81001739>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/81001739>



谷崎潤一郎の『卍(まんじ)』における文体的特徴について(一)

——越境者の聞いた「大阪語」——

湯 淺 英 男

一 はじめに

小説は「語り」(Erzählung)の一つの典型的な形式であり、それはまた「騙り」という行為とも相通ずる性格をもつ(坂部 一九九〇、四五頁)。そこでは言語のもつ様々な可能性が「語り手」—それ自体、小説家の「自我主体の二重構造」(同上、四十七頁)の現われでもある—によって駆使され、語りの構造が組み立てられることになる。従って、使用される語彙・統語論・修辭法・比喩などに見られる文体的諸特徴は、語り方≡騙り方を探る最初の手掛かりともなる。本稿では谷崎潤一郎の『卍(まんじ)』を例に取り上げ、そこで用いられた文体的特徴—とりわけ、方言、擬声語・擬態語、外来語をめぐる—について考察を試みたい。この作品自体は、谷崎が一九三三年(大正十二年)の関東大震災の後、関西に移り住み、関西を舞台にして発表した作品のうち、最も初期のものに属する。それは、一九二八年(昭和三年)から一九三〇年(同五年)にかけて『改造』に断続的に掲載されている。

二 大阪弁

この連載小説の言葉については、「第一回だけが標準語の日常語で書かれ、第二回以降は二人の若い関西婦人に大阪言葉に翻訳させたものに、潤一郎が手を加えたものを発表した」（アルバム、四二頁）と言われる。すべて大阪弁で統一され単行本化された際には（一九三一年四月改造社より刊行）、内容も一部書き換えられたとされる（瀬沼一九六〇）。当然東京日本橋出身で、三〇代後半で関西に引越した谷崎が関西方言、しかも女性言葉を扱うことは不可能である。従って助手として大阪府立女子専門学校出身の女性が順次二名、一年余り雇われることとなる（アルバム、同上、前田 一九六一、八六頁等参照）。『正（まじ）』の中で先生を相手に一人称の語り手を演じる柿内園子の言葉、あるいは園子の同性愛の相手である徳光光子の言葉――つまり大阪・関西といった地域色の強い言葉――をどのような名称で呼ぶかについては、議論があるかもしれない。小説内では徳光光子は船場の問屋のお嬢さんであり、前田（同上、二八頁）の推測によれば、柿内園子も光子と言葉使いが「全く同じ」であるため、「船場生まれの船場育ち」の同郷と見られる。谷崎自身は『私の見た大阪及び大阪人』（一九三三、引用は中央公論社版全集 第二〇巻 一九八二による）の中で、「東京人」「大阪人」に対応させる形で、「東京語」「大阪語」という概念を用いている。これは、いわば「関西人と関東人とは、生理的に、体的に、超えがたい差異のあること」（全集版三六七頁、但し仮名は現代仮名遣いに、漢字も適宜常用漢字に改めた、以下同様）を認識した上で、東京弁、大阪弁に対しても、単に共通する日本語の地域的変異形――いわゆる「方言」――以上の差異を認めた結果なのであろう。つまりそこに住む人の精神・習慣・風俗・文化すべての「超えがたき差異」は、言語の差異にも決定的に反映しているということでもある。

関東大震災で壊滅状態となった「東京が復興する迄の腰かけのつもりだった」関西への移住が、「出来得べくんば今後も永久に此の地に腰を据え」ようと思うまでになった谷崎も、「蓋し私はいつ迄たっても東京人たる本来の氣質を失わないであろう」と言う（谷崎 一九三二、全集版三五頁）。つまり大阪人、あるいは大阪語への観察は、「やはり何処迄も『東京から移住した者』の眼を以てすることになる」（同上）。これは言うなれば、関東から関西への「越境者」⁽²⁾谷崎の関西弁・関西人・関西文化への冷静で客観的な分析でもある。

二・一 標準語から大阪弁へ

単行本として出版された『卍（まんじ）』における語り手柿内園子や、徳光子の言葉は、たとえ小説内での住まいが阪神地域—つまり神戸から大阪に至る地域—の香柵園や芦屋川であったとしても、谷崎の助手の学歴から推察すれば、前田（一九六一）のように「船場言葉」と限定しなくとも、当時（つまり大正期から昭和初期）の大阪弁（谷崎の使った「大阪語」という用語の使用をひとまず保留しておけば）⁽³⁾としておくのが妥当であろう。また東京人である谷崎が、それ以前の小説で用いていた言葉については、とりあえず「標準語」(Standardsprache) としておきたい。つまり小説の言語—とりわけ地の文の中—は、東京の住人の生活の言葉とはやはり細かな点で差異が存在するであろうし、ある意味で作家によって標準化典型化された側面を持つと考えるからである。

本稿では『卍（まんじ）』に用いられている大阪弁の特徴を概観・分析してみたい。だがその前に、最初谷崎が発表した『改造』（一九二八—一九三〇）での連載（最初の数回は標準語を用いている、あるいは標準語を抜けきれていないと言われる）と、その後単行本で大阪弁に改められた作品との違いについて、若干の文体的特徴を手掛かりに見ておきたい。当然大阪弁に改めてからの作品では、東京人である谷崎が助手である関西女性のどのような大阪弁の表

現に注目したかが伺える。言い換えれば、谷崎は関西女性の大阪弁への翻訳のすべてを採用しているとは考えられず、そこには自ずから谷崎の聞く大阪弁のイメージ（むしろ彼の言葉によれば音声・声と言ったほうがよいが）が反映されていると考えられる。つまり小説に使う大阪弁については、関西女性による翻訳を標準語とも比較しながら、丹念に取捨選択していったのではないだろうか。⁽⁴⁾ いわば標準語の文体から大阪弁の文体への書き換えは、谷崎が大阪弁の特徴をどのように認識し、作品へ用いるかということを考察する上で、この上ない素材となる。

谷崎が『改造』一九二八年三月号に発表した『卍（まんじ）』の第一回つまり「その一」において標準語で執筆したことは定説になっているが、そのあとの回にどのように大阪弁を混入させていったかについては諸説があるようである（河野 一九七六 等参照）。ここではひとまず「その一」から「その四」（同年、六月号）までの冒頭部分について、『改造』版（ⅡK）と後に大阪弁に統一された版（ここでは中央公論社版全集 第一巻を用いるⅡC）を比較し、谷崎から見た大阪弁について考えてみたい（仮名遣い、漢字等は原文のまま挙げているが、ルビは省略した。また以下での説明のための傍線は湯淺による）。

(K1) 先生、わたくし今日はすっかり聞いて頂くつもりで伺いましたんですけれど、でもあの、……折角お仕事中のところをお宜しいんてございますの？ それはそれは詳しく申し上げますと實に長いんてございますのよ。ほんとうにわたくし、せめてもう少し自由に筆が動きましたら、自分で此の事を何から何まで書き留めて、小説のやうな風にまとめて、先生に見て頂かうかとも思ったり致しましたんですが、（以下略）（三月号、

【その一】

(C1) 先生、わたし今日はすっかり聞いてもらふつもりで伺いましたのんですけれど、折角お仕事のところかまひませんですやろか？ それはく委しいに申し上げますと實に長いので、ほんまにわたし、せめてもう少し自由に筆動きましたら、自分でこの事何から何まで書き留めて、小説のやうな風にまとめて、先生に見てもらはうか思ったりしましたのんです、(以下略)

(K2) ところがそれから二三日たちますと、又モデルの時間に校長先生が這入つていらして、私の繪の前に立ち止まつてはにやにやお笑ひになるんです。さうして「柿内さん」て仰つしやつて、「柿内さん、どうも此の繪は變ですね。ますますモデルに似ないやうになつて來ますね。いつたいあなたは誰をモデルにしていらつしやるんですか」つて、妙に冷やかすやうな眼つきで私の顔をじ、いと視つめるんです。「おや、さうでございますかしら。モデルに似てをりませんか」つて、わたくし癩にさほりましたものですから、わざとさう云つてやりましたの。(以下略) (四月号、「その二」)

(C2) ところがそいから二三日たちますと、又モデルの時間に校長先生が這入つて來られて、私の繪エの前い立ち止まつてにやく笑はれますね。そして「柿内さん」云ひなさつて、「柿内さん、どうも此の繪エ變ですなあ。ますますモデルに似んやうになつて來ますね。いつたいあんたは誰モデルにしてをられるのんですか」と、冷やかすやうな眼つきで私の顔じいと視つめなざるんです。「おや、さうですかしらん。モデルに似てえしませんか」と、私癩にさほりましたものですから、わざとにそない云うてやりました。(以下略)

(K3) そして光子さんは、ほんとにあなたに氣の毒でなりません、すみませんすみませんと何遍もお云ひになるものですから、わたくしの方が却つて氣の毒になりまして、「いゝえ、いいえ、あなたが悪いことありません。憎いのは校長先生です。教育家ともあらうものが、まあ何て云ふ卑劣な、……けど、わたくしでしたらどんなことを云はれようとちつとも構ひませんけれど、あなたこそお嫁入り前の身で、そんな惡辣な人たちの畏にかからないやうに御用心なさいませ」と、此方からあれこれと慰めて上げますと、(以下略) (五月号、「その三」)

(C3) それで光子さんは、ほんまにあなたに氣の毒でなれしません、すみませんと何遍も云ひなさいますから、わたしの方が却つて氣の毒になりまして、「いゝえ、いゝえ、あなた悪いことあれしません。憎いのは校長先生です。教育家ともあらうもんが、何ちふ卑劣な、……けど、わたしでしたらどんなこと云はれようとちよつとも構ひしませんけど、あなたこそお嫁入り前の身で、そんな惡辣な人たちの畏にかゝらんやうに氣イ附けなさいや」と、此方からあれこれと慰められましたら、(以下略)

(K4) 「ゆうべなあ、内でその話が出てなあ」と、光子さんは言葉をつがれて、「お母さんがわたしを呼びはつて、お前、學校でこんな噂があるさうだつけど、それほんとでつかと、そない云いますねん。へえ、そんな噂あることはありまつけども、いつたいお母さん、何處でききはりましたん? そらまあ何處でもよろしおまつしやないか。それよかそらほんまの事でつか? へえ、そらほんまです、そやけど何がけつたいでおんねん? 友達と仲好うしてゐるぐらゐで。(以下略) (六月号、「その四」)

(C4)「ゆんべなあ、内でその話が出てなあ」と、光子さんは言葉をつがれて、「お母さんがわたしを呼びやはつて、お前、學校でこんな噂あるさうやけど、それほんまでつか、云やはるねん。へえ、そんな噂あることはありまつけども、いつたいお母さん、何處でききやはりましてん？　そらまあ何處でもよろしおまつしやないか。それよかそらほんまの事でつか？　へえ、ほんまです、そやけど何がけつたいでんねん？　友達と仲好うしてるぐらゐで。(以下略)

河野(一九七六、一〇頁以下)は、『改造』誌上の『亅(まんじ)』連載において、大阪弁が会話文や地の文の中のように混入されていたかについて関心を抱く。そして第一回のみが標準語で第二回以降が大阪弁で書かれているという通説に対し、「第二回なるものの文体が、大阪言葉ではない」上に、第三回も後半になってようやく地の文、会話文に「大阪言葉が処々に混入しはじめ」、第四回目も圧倒的に多い「会話の部分は既に大阪言葉になっているけれども、地の文は殆ど標準語」であるという分析を行なっている。本稿では特に連載での大阪弁混入の変化を扱うことはしないが、例えば大阪弁が好む「ん」の付加あるいは撥音便的融合形としての「のん」「ねん」「てん」「でんねん」を手掛かりにすれば(右の各回冒頭部分の傍線箇所、及び前田一九六一、五〇頁以下参照)、第三回までの『改造』(ⅡK)では、そのような表現が連載冒頭部に限っても皆無であることがわかる。よってそれらは、標準語で書かれていることが伺える。⁽⁵⁾また逆に言えば、単行本での大阪弁への書き換えについて、撥音便の「ん」の音に谷崎が関心を寄せていたことは間違いない。以下、先の引用文も適宜参照しながら、谷崎から見た大阪弁の特徴を概観してみたい。

二・二 当時の大阪弁の諸特徴

谷崎が大阪人、特に大阪の女性の「声」に関心を持っていたことは、大阪弁の特徴との関連で注目してよい。「私は、全体から云うと、東京人よりも大阪人の声の方をより美しく感じる。(中略)女に関する限り、大阪の方に軍配を上げる」(谷崎 一九三三、全集版三六三頁)。つまり「関東女の声のスカスカして味も素っ気もないのが異様に耳に附いて」(同上、三六四頁)と関東の女性の声について極めて低い評価であるのに対し、大阪の女性の声については、「浄瑠璃乃至地唄の三味線のようで、どんなに調子が甲高くなっても、その声の裏に必ず潤いがあり、つやがあり、あたく味がある」(同上)と肯定的である。他方で、「あの、上方風の、舌にもつれるようなネチネチした声でなければ」(同上、三六六頁)とか、「京都人の発音は、東京に比べればつやがあるけれども、大阪ほど粘っこくない」(同上、三六三頁)と述べているため、大阪人の声の特徴をその粘っこさに見ていることは確かであろう。河盛(一九六七)は、「谷崎さんの『大阪もの』のなかに登場する女性たちの会話は、その声の音色まで想像して読まなければ、その魅力を本当に味わうことができないのではないか」と述べている。谷崎の言葉と符合させて考えればそれは事実であろう。

そこでまず谷崎の見た大阪人の「声」つまり発音に関わる特徴を、主要な点に絞って挙げてみたい。

(A)「ん」の多用

前節で、第三回までの『改造』連載では「のん」「ねん」「てん」などが現われず、大阪弁による書き換えの後、それらの表現が現われることを見たが、「ん」はこれ以外にも様々な形式で現われる。例えば次のような表現も大阪弁

を特徴づけるものである（以下、現代表記の観点から例文は新潮文庫版のものを用い、その場合頁数のみ付記する。また同書の引用では以下、傍点や引用句末の句読点等を省略した）。

もしもそんなこと尋ねるもんあったら（一三五）

あての方から訪ねて行って（一四五）

これは尾母音が脱落すると起こる「頭子音の逆行同化」の一つで、*dzun* √ *dzu* √ *nu* の音韻変化による（前田 一九四九、一〇七頁以下。以下同書の引用に際しては現代仮名遣いに改める）。前田（同上）は、こうした同化は「大阪訛りを強烈に特徴づけるもの」としているが、それには「ん」の音も貢献している。また否定辞の「へん」も大阪弁に特徴的である。

せエへんことはせエへん云うけど（一四四）

あてかてそない頼りにされたらどない嬉しいか分かれへん（二四九）

もう一日も辛抱出来へん（一五三）

標準語との対比で言えば、「分らない」対「分かれへん」といったように「ない」と「へん」が対応している。ただこの音韻上の変化も前田（同上、二〇一頁以下）によれば、例えば（明治以降優勢になった）「買やせん」の「せ」が「へ」に変化すると同時に、動詞の活用形もエ列音に変化し、「買えへん」になったとされる。上の例で言えば、もとは「しやせん」「分かりやせん」「出来やせん」がもとになったことになる。また四段動詞にはア列音（すなわち、「買わへん」「分からへん」等）の系列があり、一部部部を除き普及しないまま現在（つまり執筆時である一九四九年頃）に及んでいるというのが前田（同上）の見解である。⁶⁾

以上は代表的な「ん」の出現例であるが、そもそも大阪弁では「ん」つまり鼻音nそのものの出現頻度が他の子音

と比べて高い。「純粋度の高い大阪弁」における子音の出現頻度はコ√ア√カ√キ√ヨの順であり、この傾向は安永年代まで遡るとされる(前田、同上、五二頁)。前田(一九六一、五四頁)は母音に近い性格をもつ「ん」の音について、「まことに柔らかく優しい感じを与え、聞く人の心をなごやかにする」と述べているが、上記の谷崎の評価で言えば、大阪弁の「あたたか味」ということになるかもしれない。

(B) 一拍の名詞の二拍化

先に対比のために紹介した『改造』の四回の冒頭部の文章でも、中央公論社版の(C2)の「繪エ」、(C3)の「身イ」「氣イ」は、標準語の『改造』版の「繪」「身」と異なって二拍(モーラ)で発音・表記されている。こうした標準語で一拍の単語(とりわけ名詞)の、母音の長音化による二拍化は大阪弁の大きな特徴と言える。大阪弁で書き換えられた『出(まんじ)』でも、その点は一貫している。幾つか例を挙げておく。

こんな目エに遭いはった (七七)

手エ取ってみたら (八一)

根エも葉アもないウソばかりで (一一〇)

此処い名ア書いて判おして (一一三)

これについて前田(一九六一、四七頁)は「一音語を長呼する現象」と言い、「例外なしに起こる」と考えている。また次に見るように、動詞も一音語意識が働いた時には「必ず長呼される」とする(次の例も含め、同上)。

うち、あの映画見たいわア。

早よ寝エヤ。

前田は基本的に子音の発音が重視される東京弁に対し、大阪弁は「子音よりも母音を入念に発音する」(同上、四六頁)し、その結果「大阪弁の方が母音に富む」(同上、四八頁)と指摘する。これは「言った」「買った」が大阪弁では「言うた」「買うた」とウ音便となり、母音の数が一つ増える現象などとも音韻上の原理としては共通すると前田は見ている(同上、四八頁以下参照)。ただ拍の数で言えば、「言った」が「言うた」になっても三拍のままで増えない)。同時に先の(A)で示した「ん」という鼻音の頻出も、それが母音に近い音であり、また一拍としての価値を持つことから、二拍化という点では一拍の単語の長音化と軌を一にしている。しかしながら一拍の単語の長音化、つまり二拍化の議論は、高低(ピッチ)アクセントの観点からも考察できるように思われる。

周知のように関西型アクセントには、関東型アクセントと異なって、第一拍目が高く始まるか(高起式)、低く始まるか(低起式)の違いがある。そのこともあって、二拍の名詞にあっても関東型は三種類、関西型は四種類となり、関西型アクセントのタイプの方が豊富である(以上、渡辺 一九九六 参照)。しかも高・低二つの起点をもつ関西型アクセントは、拍数を増やすほどアクセントタイプ数を倍数的に増やしていく(渡辺、同上、五九頁、山下 二〇〇四、五六頁以下等参照)。こうしたことを考えれば、関西弁では無意識的に一拍名詞も拍数を増やすことで豊富な関西型アクセントを有効活用しようとしている可能性がある。例えば前田(一九四九、一六七頁以下)の「一音節語」についての説明を、拍の考えに置き換え整理しなおすと、一拍名詞は次の三種類のタイプに分かれる(牧村 一九七九の「イ(胃)」の項も参照)。

蚊ア、血イ	-----	高起式(高・高)
胃イ、毛エ	-----	高起式(高・低)
手エ、田ア	-----	低起式(低・中)

ここで「中」としているのは、例えば当該の名詞のあとに格助詞「が」が来る場合、「が」の高さまで二拍目の「エ」
「ア」のピッチの高さが上がらないためである（渡辺 一九九六、五三頁以下参照）。これに対し例えば京都出身の山
下（二〇〇四、六〇頁以下）は、次のような例を挙げ、「関西弁には一拍の単語は存在せず、すべて二拍で発音する」
という説に反論する。つまり「関西人にとって一拍語と二拍語の区別は明白である」という主張である。だが、（播
州出身の筆者との語感差を考慮に入れても）再反論の余地はあるように思われる。

あっ、木がない。

あっ、キーがない。

最初の例の「木」についても、筆者の語感ではやはり「木ィ」と二拍となり（上記の牧村 一九七九でも同様）、「キー」
との違いについては、やはりアクセントタイプの差が弁別的であるように思われる。

木ィ ----- 低起式（低・中）

キー ----- 高起式（高・低）

大阪弁そのものに一拍の名詞があるかどうかの検証は今後の課題としたいが、小説の会話文の表記からして、谷崎も
こうした一拍の単語の長音化現象については、確実に大阪弁の特徴と見ていたと言える。

（C）方向を示す格助詞「い」

以上は主に大阪弁の音韻に関する特徴であったが、ここからは文法に関する特徴を見てみたい。前述の（B）の例
の中に「此処い名ア書いて」という表現があったが、ここで用いられている格助詞「い」は『卍（まんじ）』の中
でも頻出する。以下の例はすべて「その十五」の中のものである。

電話口い走って行きましてん (九五)

梅田の阪急い来てくれへんか (九六)

奈良い行こやないか (九六)

若草山い登ろなあ (九六)

奈良い着いたら (九七)

うしろの山いづく谷の方い下りて行きましてら (九七)

これらの「い」は、方向・行き先を表わす格助詞「へ」が「訛った」ものとされるが(前田 一九四九、二四八頁、牧村 一九七九も参照)、標準語の「に」に対し大阪弁あるいは広く関西弁で「へ」が使われるのは古来からの特徴とみられている。そしてその証左としては室町時代の「京へ、筑紫に、坂東さ」ということわざなどがしばしば挙げられる(前田 一九六一、一三七頁、山下 二〇〇四、九〇頁参照)。現代標準語では、上記の例の格助詞「い」の箇所は、すべて「に」が用いられるであろう。ただ目的を表わす格助詞「に」と重なる時には、標準語でも「へ」が一般的になるようである(山下 二〇〇四、九四頁)。山下(同上)は次のような例を挙げている。

図書館へ勉強に行こうか

『正(まんど)』にも、「三越い買い物に行きなさったら」(一四〇)という例があるが、このケースは標準語でも「三越へ」となるであろう。基本的に大阪弁では、ある地点に接続する「い」と「に」に関し、移動に関する方向・到達地点と静止状態に関する場所という意味論的対立が、標準語よりも明確化していると言える。後者に関する「に」の例としては次のようなものが挙げられる。

山の上にある茶店で (九七)

もうちょっと此処にいてたいわ (九七)

誰ぞもう一人電話口に立ってて (一一三)

つまり方向や到達点を示す機能に関し、標準語の「へ」と「に」は重複している側面があるが、大阪弁の「い」(つまり「へ」)は、「に」と完全に相補的な役割分担を果たしている。そのことは同時に、多様な用法を持つ「に」の負担を軽減していることにもなる。

(D) 無助詞構文について

東京弁に比べ、大阪弁においてはよく助詞が省かれる。このことについては、すでに谷崎も「うち分かれへん」という例を使って言及している(本稿注(4)参照)。また「てにをは」の省略を大阪弁の特徴とする見方は、当時からかなり一般化していたと見ることもできる(前田 一九六一、八二頁以下参照)。しかし「が」「は」「を」の省略(「省略」という見方については検討が必要だが、とりあえず使っておく)については、東京弁でも行われていたのは事実であり、とりわけ大阪弁の特徴として特筆すべきなのは「と(言う)」の省略であろう(前田、同上、また山下二〇〇四、八七頁以下も参照)。ただ『正(まんじ)』『その一』の助詞「が」「は」「を」「と(言う)」「と(思う)」の省略を数値的に分析した前田(同上)は、そこでの「と(思う)」の省略率が七五パーセントで三位に位置することに對し、「谷崎大阪弁では機械的に実態以上に省略しているように思われる」(前田、同上、八六頁)と述べている。このことは逆に、「谷崎大阪弁」が多少なりとも谷崎の意識を通して抽象化・理想化された可能性があることを示して興味深い。

確かに二・一で挙げた雑誌『改造』(ⅡK)の「その一」から「その四」と、大阪弁に書き換えられた中央公論社

版全集(ⅡC)を比較しても、前田(同上)の調査から予想される通り「を」の省略がかなり多い。例えば「を」「が」「は」のK版での出現数をもとにその省略度を見ても、「を」は七個の内五個が省略されているが、「が」「は」について言えば(但し、「は」についてはK1の「それはそれは」は除く)、それぞれ八個の内三個省略、八個の内一個省略と、省略される割合は落ちる(因みに上述の前田(同上、八八頁以下)の単行本版の「その一」の分析―当然『改造』掲載版との比較という手法ではないが―では、「を」の省略率は九十一・〇四パーセント、「が」は六〇・七一パーセント、「は」は二三・七三パーセント)。これらから考えれば、大阪弁では、「を」という格助詞を基本的に用いないと考えることができる。先のK版、C版の比較で「を」が省略されていない例も、「光子さんは言葉をつかれて」(K4)という比喩的表現の場合、及び「お母さんがわたしを呼びはって」というような「誰が誰を」ということがことさら強調されている場合に限られる。前田自身(同上)は、「a 改まって言う場合 b 念を押して言う場合 c 強めて言う場合」には「を」を使用するが、そうでなければ省略すると述べている(先の二例をあえて分類すれば、前者がa、後者がbないしcに当てはまるだろう)。尾上(一九九九、一六二頁)は、前田(同上、九十三頁)が述べた「この提灯、もろて往ぬで」といった例についての見解、つまり「を」の省略か「は」の省略かはっきりせず「理路がぼやけてしまう」という見解を批判し、「通告や希望表明の場合は助詞なしを選ぶことが常態なのであって、「を」や「は」は特にある気持ちを表現したい場合に限って用いられるものである」と述べている。ただ前田が助詞のあることを常態として論を組み立てている点を除けば、前田と尾上の見解にそれほど大きな隔たりがあるようには思えない。ただ大阪弁に限って言えば、尾上の言うように「を」を用いない(つまり省略するということではなく)ことを常態として考えるべきであろう。とりあえずここでは、K版、C版の比較からわかる種々の助詞を用いない大阪弁の例を一つずつ挙げておこう(傍線は湯淺による)。

いったいあなたは誰をモデルにしていらつしやるんですか (K 2) ↓

いったいあなたは誰モデルにしてをられるんですか (C 2)

筆が動きましたら (K 1) ↓ 筆動きましたら (C 1)

どうも此の繪は變ですな (K 2) ↓ どうも此の繪エ變ですなあ (C 2)

それほんとでつかと、そない云いますねん (K 4) ↓

それほんまでつか、云やはるねん (C 4)

先生に見て頂かうかとも思つたり致しましたんですが (K 1) ↓

先生に見てもらはうか思たりしましたんですが (C 1)

また柿内園子が一人称で語るといふ様式をとっているためか、『正(まんじ)』の中では、『…』云うて」といふ形式で出来事を展開する語り口が多用される。一つだけ例を挙げておこう(傍点は省略、傍線は湯淺による)。

「奥さん奥さん」云うて慌てて仲居さんが駆け上って来て、「(略)どないしまひよ」云いますので、「何でやって来たんやろ」ときよっとしながら顔見合わしてんけど、「兎に角あて会うてくるわ、光ちゃんそこにすッ込んでや」云うて、玄関い降りて行きましたん (一五四)

ここでは大阪弁の「と」のない表現が、話の展開にスピード感を与えている。ただ「云う」という発話動詞に接続されない場合には、「と」のみの表現でもって「云うて」を予想させる形になっている。つまり文体的には「と」と「云うて」がかなり等価的存在になっている。

(E) 接続助詞「さかい」と「よって」

『卍(まんじ)』の中には、理由を表わす接続助詞「さかい」が極めて多く用いられている。また同時に理由を表わす「よって」も用いられる。現代の大阪弁・関西弁ではそれほど用いられているとは思わないが、当時、つまり大正時代・昭和初期にはやはりこうした接続助詞は大阪弁を代表するものであったと予想される。それより以前の幕末の福沢諭吉も郷里の中津へ帰ってもしばしばそれを用いていたとされる。「大阪さかい」という言い方も当時普及しており、幕末の頃にはすでに大阪を代表する方言として定着していたようである(以上については、前田 一九六一、九九頁以下参照)。「卍(まんじ)」の中の「さかい」の例をまず挙げてみよう。

僕かてやっぱり何や心配ですさかい (一一〇)

結婚するのんに必要やさかい (一一三)

どないしても聴きなされしませんさかい (一二七)

意味ありげに笑ろてるさかい (一二八)

それが第一の目的やさかい (一三五)

また「よって」の例も挙げておく。

うちめったなこと教せられへんよって (一〇〇)

自分にも責任あるよって帰るに帰られへん (一〇〇)

乗りかけた船やよってしょうがない (一一〇)

けどもう私は、どんな事あっても二度と別れる云うこと出来へん気持ちになってましたよって (一〇三)

いつやあんなりになってしてもて何や気持ちが済まんよって (一〇三)

「よって」と「さかい」の意味上の関係について、前田(一九四九、二五四頁)は、「同義」であるが、「よって」は

「さかい」よりも意味が「強い」と述べている。厳密な分析は今後の研究を待たねばならないが、例文を見る限りでは、「よって」で示される理由の方が話し手にとって自分に関わる自明な事実が多く、「さかい」の方がより客観的論理的因果関係を述べているように感じられる。

ところで前田（一九六一、九九頁以下）は、「さかい（に）」「よって（に）」と東京弁の「から」を比較し、大阪弁の助詞の二音以上の多音的傾向を指摘し、それを大阪弁の「テンポののろさ」の原因（同時に言葉そのもののおかしの原因ともしている）と見る。これに関して尾上（一九九九、一四六頁以下）は、音数の多少で言えば東京弁と大阪弁が逆になるケース（例えば、「行ってみたけれど」対「行ってみたけど」）も多く、「大阪弁は音数が多い」とか「大阪弁はのろい」とかいうことは、「事実を根拠としては主張できないことである」と反論している。例えば先の（D）で述べた無助詞構文をとっても大阪弁の方がむしろ文にスピード感があり、前田の主張の論拠は大阪弁全体をとって考えれば必ずしも正当とは言えない。だが現在大阪弁・関西弁で「さかい」があまり用いられなくなったのは（例えば、山下 二〇〇四、一六三頁）、やはり音節（あるいは拍数）の多さが挙げられる。そして代わりに標準語の「から」が関西でも一般的になりつつあるのは、大阪弁内部でも四、五十年前と比べ発話にスピードが要求される時代になった証しであろう。⁸ 例えば当時の「そやさかい」（二一五）は、現代では拍数の一つ少ない「そやから」に交代しつとあると言える。

（F）様々な文末表現——終助詞など

すでに述べたように大阪弁の終助詞については、『卍（まんじ）』においても「ねん」「てん」「でんねん」等が多用され、大阪弁らしさを表現している。しかしながら、それ以外にも多様な「命令」「願望」「禁止」「疑問」「感動」等々

の終助詞が存在することは言うまでもない(前田 一九四九、二六一頁以下参照)。例えば疑問形式をとった反語的
命令形式は東京弁よりもかなり表現形式は多い。例えば前田(同上)の挙げる例では、男言葉として、「早よせんか」
「早よせんかい」「早よせんかいな」、女言葉としては、「早よしんか」「早よしんかい」「早よしんかいな」があるが、
さらに尾上(一九九九、六一頁以下参照)では、「少し居丈高な感じ」がする「かいや」のタイプ、つまり「早よせん
かいや」が加わる。だがこうした終助詞的表現はどちらかと言えば、口語でもぞんざいな口調に属す。従って、「⁹⁾正
(まんじ)」の登場人物のような当時の比較的上流階級の女性や良家の子女の会話の中にはあまり出てくるとは思えな
い。よって谷崎の書く小説内の会話文においても、「ねん」「てん」等を除けば比較的文末表現に限っては標準語的な
印象を受ける。ただそうした会話文の文体の中でも、「ねん」「てん」等以外で、幾つか大阪弁らしい文末表現を紹介
しておこう。

まず「ひょ」を取り上げると、これは大阪弁らしい音韻変化の結果生まれたものである。

もうちょっと話しまひよなあ (一一三)

又もとの方いもどりまひよか (一一五)

「梅園」で待ち合いまひよ云うて (一一八)

どないしまひよ (一一四)

標準語で言えば、「話しまししょう」「もどりまししょう」などとなるところだが、「う」が脱落し、なおかつ「しょ」が
「ひょ」に変化している。音韻的には齒茎摩擦音が声門摩擦音に変化するという大阪弁に極めて特徴的な音韻変化で
ある(つまり、s √ r : 例えは(A)で述べた否定の「へん」も「せん」が変化したもので、同種の変化)。また
意志・推量・勧誘などを表わす助動詞「う」が欠如した形で同じ意味を表わすということは、「ひょ」が終助詞化し

ていると考えられる。⁽¹⁰⁾次に挙げる「がな」も大阪弁に典型的な終助詞と言える。多くはないが『卍(まんじ)』にも幾つか例が現われる。

誰ぞ知ってるお医者はん頼んだらよろしいがな (一〇〇)

誰ぞもう一人電話口に立っててコソコソ相談してみたけどがな (一一三)

これはどちらも柿内園子の徳光光子に向かつての発話であって、相手を非難する気持ちを含む(前者は嘘をつかれて光子のいる病院に呼ばれたため、後者は着物を持って来るよう男のいる宿屋に電話で呼びつけられたため)。女性の発話が多い『卍(まんじ)』に「がな」の例が多くないのも理由がある。他からもう少し例を拾ってみると、「そこにあるがな」「どうでもええがな」「知らんがな」(以上、牧村 一九七九)、「それ俺のんやが(な)」(前田 一九四九)、「あれ(は)木村さんやがな」(前田 一九六一、一六二頁以下)などが挙げられるが、どれも当時の上流階級の女性が発する言葉とは普通考えられない。前田(一九六一、一六二頁以下)によれば、「がな」の「が」は「そうではあるけれども、しかし」という意味であり、そこには「レジスタンスの精神」が表われている。そしてこの終助詞自体、「相手をたしなめるとか、相手を啓発するとかの気持ちを表わす」場合に使われる。仮にこの気持ちが強すぎるとけんかになりかねず、「が」に添える「な」はその「安全弁の役目」を務めていると前田(同上)は見ている。だがこの「な」は、表現を和らげるというより、むしろ相手を少し突き放し、相手と心理的距離を置くといったものである。先の『卍(まんじ)』の二例も、園子は光子の反論も想定に入れつつ、かなり強い口調でたしなめたり、非難めいた主張をしていることになる。ただそこには、相手を少し突き放す冷めた感情が読み取れる(しかしながら光子は園子にとって同性愛の相手だけに、心理的にはもう少し複雑な感情が潜んでいるかもしれない)。

「がな」よりももう少し女性が使いやすい終助詞としては、「わなあ」が挙げられる。これは「卍(まんじ)」の中にもしばしば出現する。

姉ちゃんかてそうやわなあ (一八三)

あて飲ましたげるわなあ (一九六)

あんた段々綿貫みたいになって来るわなあ (二〇二)

あんまり我が儘さし過ぎてんやわなあ (二〇四)

文末で用いられているこれらの「わなあ」は、終助詞の「わ」にさらに終助詞の「なあ」が接続したものと考えられる。しかしながら前田(一九四九、一九六一)などでも「わ」と「な(あ)」は別々に説明されているだけで、特に両者がつながった形態での説明はない(ただ、「そんなこと云はれたら、あんたかて困るわなあ」という例が前田(一九四九、一六八頁)にあり、「相手の身になっての推量に共鳴を求める表現」としている)。しかし谷崎がこうした表現を頻繁に耳にしていたことは事実であろう。一番目と四番目の例で「わ」は「や」に接続しているが、前田(一九六一、一五八頁以下)によればこの「やわ」は女性専用の言い方であり、断定を意味する。二番目、三番目の例のように終止形に「わ」が付く場合は、男女共用ということになる。「なあ」あるいは「な」については、東京弁では「ねえ」「ね」が対応する。意味としては、詠嘆の情を「相手に人なつつこく訴えることにある」とされる(前田 一九六一、一五五頁参照)。一番目の例は、園子が光子に言った「もし間違うてあて死んだら光子ちゃん死んでくれるなあ?」に対してなされた光子の発話であるが、園子に対し甘く懇請する言葉は、まさに「(やわ)なあ」がふさわしい。前田(一九六一、一七〇頁)は一つの結論として、大阪弁は「論理的価値を表わすよりも、情意的価値を表わすに長じている」と述べているが、こうした「わなあ」もその代表的例となろう。

終助詞に関し特徴的なものの紹介はここまでとし、最後に敬語の「はる」についても触れておきたい。「はる」の形は極めて多彩であるが、まず例を挙げてみる。

ついさっきまで起きていやはりましたけど、もうちょっと前お休みになりました (七七)

今お宅の奥さんと家のとうちゃん何処そこい逃げはりました (一七六)

これらの例で出てきた尊敬表現のうち「なりはる」「逃げはる」は「動詞連用形+はる」という典型的なケースである。他方「いやはる」は連用形に「やはる」が付くケースで、これも多く使われる(以下の説明も含め、前田 一九四九、二三〇頁以下、前田 一九六一、一八〇頁以下参照)。もともと「やはる」「はる」は「なさる」が音韻変化したものである。つまり大阪弁特有の(終助詞的な「ひょ」のところでも説明した) s √ r の変化によって、「なさる」が「なはる」になり、その後、「な」が「や」に変化したものである。さらには「や」が落ちて「はる」という形にはなったが、先の「いやはる」でもわかるように古い形として「やはる」も残っている。また言うまでもなく「なさる」という尊敬語も並存して使われている。「やはる」「なさる」を用いた尊敬表現は、次の例も参照のこと。

お医者はん絶対に心配ない云やはりますし、もう大分正気づいて来やはりまして、ときどき眼工開いたりしやりますすのんで (一八〇)

いつでもすうッ澄まして通り過ぎてしまいなさるのんに、どう云う訳やにっこりしなさって、眼エで笑いなさるのんです (一七七)

また「はる」の付く形は連用形のほか、未然形もある。これは、例えば「行きなさる」↓「行きなはる」↓「行きはる」↓「行かはる」のような変化の結果とされる(前田 一九六一、一八一頁参照)。次に挙げる例は、継続相「云うてる」の尊敬表現であるが、それ以外「たはる」となる尊敬表現の例は『卍(まんじ)』にはないように思われ

今奥さんの旦那さんがお見えになって、お二人さんに会いたい云うたはります。(一五四)

当然ここでは「云うてはる」という形も可能であり、実際には以下で見るように「てはる」の形が多い。

そのお金は自分の生活費に使てはりますねん (十九)

日曜のたんびに遠足会やとか、そんなことばっかりしてはりますさかい (十九)

市会議員のいとはんもよろこんではるやるなあ (二十六)

これらの例でも言語慣用的には、「使たはる」「したはる」「よろこんだはる」という「たはる」形も使える。しかしそれが使われず「てはる」形が多数を占めるのは、やはり前田(一九四九、二三三頁)も言うように、尊敬形は一般に「連用形」に助動詞・補助動詞が付くため、その形式に類した「てはる」形の方が「上品な物云い」ということになるからであろう。

最後に「はる」の持つ合理的機能性について触れれば、それが命令形にも使えるということが第一の点であろう

(前田 一九四九、一三四頁、前田 一九六一、一八一頁)。

早く掴まえとくなはれ (一七六)

何卒あんたさんもそのお積りで内証にしといとくなはれ (一八〇)

お二人さんの命助ける思て願ひ聴いたげとくなはれ (一八〇)

尊敬の助動詞の「(ら)れる」や補助動詞「なさる」を付けた形では、命令文は形成不可能である。しかし「(や)はる」は「なはれ」という命令形を持つ。これは相手に丁寧に要請・要求がしたい時に、大阪弁がいかに使い勝手がよいかを示している。前田(一九四九、一九六一)は大阪弁に対して「歯切れが悪い」「鈍長・悠長」という形容をし

ているが、ここで紹介した尊敬の命令形などはむしろその逆で、大阪弁は合理的機能的とも呼べる性格を備えている。

(G) 大阪弁特有な語彙——副詞的な表現を中心に

本稿は『**卍**(まんじ)』の中の特徴的な大阪弁、とりわけ音韻や文法に関するものを取り上げ、関西移住後、五、六年しかたっていない谷崎の耳に大阪弁あるいは関西弁がどのようなものとして入ってきたのかを探ろうとする試みである。しかしながら大阪弁特有な語彙も当然谷崎の耳には入ってきたであろうし、また小説にも使われている。ここでは主に副詞的な表現を取り上げてみたいが、その前にまず名詞・代名詞・接尾辞・動詞などを挙げておこう(掲載頁については一つ挙げるが、当然複数出現しているものが多い)。

〔名詞・代名詞〕

てんご(悪ふざけ)(一一二)、きんの(きのう)(二三)、よんべ(ゆうべ)(九〇)、ろうじ(路地)(六七)、あて(私)(四三) 等々

〔接尾辞〕

くやかい(など、なんか)(二二) 学校やかい)、くしな(際、時)(九四) 帰りしなに) 等々

〔動詞〕

行ぬ(帰る)(九五)、寝(やつ)す(化粧する)(八五) 等々

〔補助動詞〕

くてやる(てあげる)(二五八) ぞない云うてやりましたら)
くても(た)(てしまった)(一六〇) 着物盗まれてしもてん)

くしておます (ています) (六四) 氣いついてやおまへなんだのんが) 等々

ここで挙げた名詞などの多くは、すでに説明した撥音便化・長音化によって、標準語とはかなりかけ離れたものになっており、大阪弁特有の語彙になっていると意識されている。また補助動詞の「くてやる」は「云うてやる」「話してやる」「書いてやる」の例が多いが、どれも標準語の「くてあげる」ほどには相手に恩恵を与える意味は感じられない。

次に副詞あるいは形容詞の副詞的用法で特徴的なものを挙げてみたい。大阪弁にはこの種の語彙が多い。前田(一九四九、四〇六頁以下)も大阪弁の副詞については、「淳朴さを有する」もの、あるいは「粘りのあり奥行のある情味語」「人なつこい物柔らかな副詞」などと評し、総じて「大阪副詞にはいろんな情の掬すべきものが多い」と述べる。以下文脈と共に紹介したいが、ここで挙げるものの中には、形容詞の副詞的用法も含む(傍線は湯淺による)。

〔副詞や形容詞の副詞的用法など〕

あんじょうペテンにかけられた上にそないエゲツのう疑われたら (一四三)

綿貫はせえだい聞くのんですが (一一一)

前の浜には仰山海水浴の人行てますし (一八〇)

蕨やら、ぜんまいやら、土筆やら、たあんと採りました (二四)

大きに濟みませんことです (六八)

えらい濟んまへんなあ (五九)

ほんまに今度の日曜に、二人で奈良い行きなされしませんか (二二)

感づいてるもんちよびツとよりないやろ思てますさかい (一三六)

なんぼ熱烈に愛し合うてたかて (一一六)

あないに秘密打ち明けて (一一九)

そないいつ迄も一人でいられる筈ないさかい (一三六)

どない親に云われても (一三七)

こないこないせえ云うといた (一四〇)

お互にもうすつくり打ち解けてしましましてん (一一)

あんまり長いことしゃべったせえかけつたいに興奮して (二〇五)

呻りごえが段々しんどそうになつて (九〇)

しょことなしにそないしたのんですが (九一)

こいでようよう胸すつとしました (一一)

とうど学校の方い手廻して (一九) 等々

以上の副詞あるいは形容詞の副詞的用法を見ても、量の多少に関するものや、行為・事態の様態あるいは評価に関するものが多いように思われる。右の例の中の「エゲツのう」は「ない型」(前田 一九四九 参照)の形容詞「エゲツない」の連用形がウ音便したものである。ただ次に挙げるような評価を示す形容詞は、副詞的には用いられなかつたり、用いられにくいと思われる。

あんな学校行つたかつてしょうむない (八〇)

あほらしい (三三)

あとの「あほらしい」には否定形の「あほらしいもない」(三四)という形も使われているが、それは「あほらしい」

の強調形であつて、「せわしい」「せわしない」と同様である（新潮文庫版『卍（まんじ）』注解参照）。

先に引用した前田（一九四九）も「大阪副詞」という言葉を使つていたように、大阪弁には生活感情と密接に関係した副詞が豊富である。それに対して「接続詞・感動詞には特筆すべきものは少ない」（前田 一九四九、四〇七頁）と言える。『卍（まんじ）』にしばしば出てくる以下の接続詞も、それぞれ「それで」の音韻変化したものの、「そやけど」の省略形と考えられる。

そいで毎日のように会つてゐることは会つてゐるけど （一三七）

けどお前がそないに美人や云うのなら （二二）

こつでの「そいで(soidé)」のoiも二重母音とみなせば、「それで」から「そいで」は三拍から二拍に短縮されることにもなり、「大阪弁はテンポがおそい」（前田 一九六一、一〇五頁）という評価は当てはまらない（尾上 一九九九も参照）。こうした接続詞に関わつて、標準語と比べ拍数の短縮する例は、例えば「そいでも」（一一〇）（↑「それでも」）、「そやけど」（二三〇）（↑「そうではあるけれど」）、「そしたら」（二三三）（↑「そうしたら」）など多い。

二・三 大阪弁の文体への評価

谷崎の『卍（まんじ）』の大阪弁の文体については、すでに幾つかの評価はなされている。例えば塚出身の河盛（一九六七）は、谷崎が女子専門学校出の若い女性を使って大阪弁に翻訳させ、さらにそれに手を加えて完成させたという経緯をふまえ（本稿の二参照）、「この大阪言葉は、あまり正確すぎて、もしくは文法的でありすぎて、どこか流動性に乏しい感じのする理由がよく分かるような気がする」と述べている。このような評価は大阪出身の作家である河野（一九七六、二四頁）の以下の説明にも通じるであろう。『卍』の文体は一体に、表面的に大阪言葉の感じの

強い露骨な大阪言葉を扱ひ過ぎてゐるようである。というのも、原文の一語々に拘泥りすぎたために、敢えてそのような無理を犯すしかなかったのかも知れない。」すでに触れたことでもあるが（本稿注（4）参照）、谷崎は「東京語」と「大阪語」の差異について、「声」のみならず文法的にもかなり鋭い分析を行なっている。例えば、「大阪語」は「東京語」に比べ、「てにをは」の省略が多いこと、「と」を省いた『谷崎』云う人」といった表現を使うこと、敬語法の種類が非常に少ないこと、丁寧さを表わす「御」という接頭辞のついた語が少ないこと、さらに言い回し全体をとれば、「大阪語には言葉と言葉との間に、此方が推量で情味を酌み取らなければならない隙間があること」等が指摘されている（谷崎 一九三二、全集版三八四頁以下参照）。これらは、谷崎が大阪弁による翻訳をさらに自分で推敲し作品に仕上げる過程で気のついた大阪弁の文法的事実であると言ってよい。このことは以下の言葉でも分かる。「最初に東京語で書いて、それを大阪語に直そうとすると、二種類の表現に対して、一種類しか表現法のないことがある。」（同上）これは「東京語」における「は」「では」「それぞれの付く二つの表現が、「大阪語」では助詞を欠いた表現一つになることを言ったものである。こうした大阪弁についての精緻な分析・適用は、結果として関西出身者から見れば「文法的でありすぎる」「流動性に乏しい」（以上、河盛）「表面的に大阪言葉の感じの強い露骨な大阪言葉」（河野）という印象を受けることになる。確かに本稿で分析したような大阪弁特有な音韻的文法の特徴については、『正（まんじ）』の中では例文集のごとく収集可能である。これは河野も言うように一語一語東京弁と大阪弁との対応を厳密に考えすぎた結果であろう。しかしそれは逆に大阪弁らしい文の流れを失わせることになっている。例えば、以下の会話（「その二十六」内、一六二）は徳光光子の男である綿貫が柿内園子の夫の弁護士事務所を訪ねた際のやりとりである（湯淺が地の文を省き、誰の発話かを付記）。

綿貫「僕かて何も、自分のために働いて欲しい云うのんやあれしませんが、今度のことは、あんたの利害と僕の

利害とが偶然一致してゐる思たのんで、伺うたのんです。あんたかてそれは認めなざるやろ」

柿内(夫)「そんなこと僕は考える余裕もなし、又考えとうもありません。失礼ながら、僕はあんたと、ぐるになつてそんな事件の中い捲き込まれとうないのんです。僕は自分の自由意志で自分の妻を処分するだけです」

綿貫「ああ、そうですね、そんなら仕方ありませんが。ほんま云うたら、僕かてあんたには縁もゆかりもないのんですから、こんなこと頼みに来られる義理やないのんですけど、それでも僕、もし園子さんが光子と一緒に逃げるようなことあつたら、困るのは自分ばかりやない、それ知つてながら黙つてたらあんたに対しても不親切や思て来たのんです。そないなつたら、あんたかて嫌でも事件の中に捲き込まれてしまひますで」⁽¹¹⁾

谷崎が標準語で初めにどのような文章を書いていたかは不明だが、この綿貫と柿内園子の夫の会話については、おそらく本稿でまとめた(つまりは谷崎が大阪人・関西人の「声」を聞いて認知していた)大阪弁と標準語との差異を一語一語検討し、言い換えていったものと推測される。例えばそれは、「僕も」↓「僕かて」、「働いて欲しいと云う」↓「働いて欲しいと云う」、「のではありませんが」↓「のんやあれしませんが」、「あなた」↓「あんた」、「一致して」と思つた」↓「一致してゐる思た」、「考えたく」↓「考えとう」、「事件の中に」↓「事件の中い」、「と云つた」↓「云うてやつた」(「と」は省略)、「それなら」↓「そんなら」、「ほんとうのことを云えば」↓「ほんとと云えば」、「それでも」↓「それでも」、「それを知つていながら」↓「それ知つてながら」等々の逐語的な翻訳である。内容的にも極めて論理中心のものであるが、そこで展開されている発話は、谷崎(一九三二、全集版三八五頁)も説明している「何処から何処まで満遍なく撫で廻すようにしゃべる」東京のしゃべり方なのである。尾上(一九九九、一三〇頁以下)は「ねこが池に落ちた」という事情を説明する「ポチャーンねこ落ちよつてん」という大阪弁を分析し、大阪弁らしい言葉の運び方について、「内部に緩急の差を持ち、飛躍を含みながら、話し手のダイナミックな目の動き、気

持ちの動きを直接的に反映しているもの」であると述べている。これを大阪人の生きるリズムと重ね合わせ、「停滞を嫌い、変化を好み、イラチで敏捷でダイナミックな動き」が大阪のリズムであると言う（尾上、同上、一三三頁）。先の二人の男性の会話は論理的やりとりであるため、このような大阪弁の持つリズムを反映させること自体必ずしも容易なことではないかもしれない。しかしながら大幅に発話を短くしたり、内容の順序を入れ替えたり、場合によっては「小さく原文を裏切る」（河野 一九七六、一四四頁）ことも視野に入れば、もう少し躍動感のある会話にすることも可能であっただろう。だが関西に移住して五、六年しかたっていない谷崎にとって、関西人の生のリズムと不即不離の言葉のリズムを身につけることは、「声」や文法の習得以上に時間を要することであったと想像される。

（つづく）

【注】

（1）『辻（まんじ）』の大阪弁への翻訳に関わった二名については河野（一九七六、一四頁以降参照）に詳しい。二名と言っても、これは一人目の女性が結婚して家庭に入ったため、専門学校の後輩がその後任になっての二名である。河野（同上）によれば、最初の女性はもともと大阪出身者ではなく、岡山あたりの出身とのことである。岡山弁自体は大阪弁とかなりの開きがあると言えるが、専門学校時代およびそれ以後という若い年代に大阪で生活していたことを考えれば、岡山出身者であることがたとえ事実であっても、それが大阪弁への翻訳に大きな影響を与えたとは考えにくい。

（2）日本語で小説を書く英語母語話者リービ英雄は時に「越境者」と見做され、自らもそのように見ていると述べている（『日本語なるほど塾』二〇〇五年 四・五月号参照）。谷崎も関東から関西への越境者として、新たな文学の可能性を発掘していったと見ることが可能である。

（3）河野（一九七六、一八頁以下）は、小説内で用いられる大阪弁が必ずしも正統純粋な大阪弁ではないという当時の意見を答

認しつつ、それがむしろ谷崎の希望であったのではないかという推論を展開している。理由は、次第に葎屋や香柙園に居宅を構えるようになった大阪人は大阪言葉に対して「共通語的な言いまわしをあしらいがち」になって、「けったいな大阪言葉」をつくりつつあったためというものである。ただ河野（同上、一六頁）も指摘するように、谷崎は『卍（まんじ）』執筆当時「関西へ移住してから、まだ五、六年にしかならない」のであり、むしろ阪神間に居宅をもつ婦人たちの大阪弁の微細なズレにまで関心を持てる状況ではなかったと想像できる。むしろ、谷崎自身が関心を持つ標準語と大阪弁の違いが必ずしも言葉全体を俯瞰したものでないために、小説の大阪弁が正統な大阪弁からはずれた部分を持つ結果になったと見るほうが適當であろう。

(4) 谷崎は『卍（まんじ）』を執筆する際、大阪弁のもつ文法的特徴について、かなり詳細かつ鋭い分析を行なっていることは確かである。例えば、大阪弁のもつ頻繁な助詞の省略という特徴（例えば、前田 一九六一、八二頁以下参照）については、次のように述べている。「これは適切な引例でないかも知れないが、東京語で「私は分らないわ」と云うのと、「私では分らないわ」と云うのとは使う場合が違う。然るに大阪ではそんな区別がなく、恐らく執方の場合にも「うち分れへん」というだけであろう。もしこの引例が間違っていたら訂正するが、大体に於いて私の云わんとする所は間違っていない。小説『卍』を書く時に実は始めて気が付いたのだが、大阪の言葉はそう云う点が妙に粗い。」（中央公論社版全集 第二〇巻、三八四頁）つまり谷崎が『卍（まんじ）』を執筆する時点で大阪弁らしさと認識している表現手段は、文体の書き直しの際にかんりの割合で取り入れていると考えられる。

(5) 「ねん」については大阪弁の代表的な終助詞的表現として、しばしば取り上げられる。もともと「のや」が「ねや」を経て「ねん」になったとされるが、標準語で言えば「のだ」が対応する（前田 一九六一、一四七頁、尾上 一九九九、三四頁以下参照）。尾上（同上）では、「告白」「訴え」「教え」等々の「のだ」と共通する機能が「ねん」についても分析されている。

(6) 一八歳まで主に播州で育った筆者には、むしろア列音、例えば「買わへん」「行かへん」の方が、単純な否定形としては馴染みがある。ただ「買えへん」「行けへん」も実際には使用していたが、それは「買うことができない」「行くことができない」という不可能の意味を含んでおり、ある種の機能分化が行なわれていたように思われる。こうした傾向は京都弁でも見られる

ようである(山下 二〇〇四、九二頁以下参照)。

- (7) 音韻上の \sqrt{r} という変化については、例えば「その疑いさいなかったら」(二〇六) のような $\text{see} \sqrt{\text{say}}$ 、「前掛」の発音に見られる $\text{maekake} \sqrt{\text{makake}}$ などによっても知ることができる(前田 一九四九、一三二頁、牧村 一九七九等参照)。
- (8) 最上(一九九九)によれば、一九六〇年代のアナウンサーの読むスピードは、一分間に三〇〇字前後とされていたが、その約四〇年後のアナウンサーは三〇〇字後半から四〇〇字前後を読むようになってきていると指摘している。まして谷崎が『卍(まんじ)』を書いた一九三〇年前後と比べれば、現代の話す(あるいは聞き手がとめる)スピードは格段と速くなっているであろう。

(9) ここで用いられている「ん」は、もともと否定の「ぬ」から来ているため、本来は未然形(ここでは「せ」)にしか接続しないが、連用形(ここでは「し」)にまで接続している(尾上 一九九九、六二頁参照)。これは「んか(い)」が全体として終助詞化している証拠と見ることも出来る。

(10) 「ひょ」については、子音が母音ほど入念に発音されないという大阪弁の特徴の現われでもある(前田 一九六一、四六頁以下参照)。つまり子音の摩擦に必要な口腔内の狭めが後方へ下がり、単なる息の摩擦になっている。他方で「しょう」の「う」が消失することは、前田(同上)の言う「母音過多」が必ずしも大阪弁すべてで一般化できないことを示している。

(11) 綿貫の発話の中の「仕方ありませんが」「思て来たのんです」のあとには地の文が挟まっているため、あとの発話をつなげた場合、句点(。)になるか読点(、)になるかは不明。一応句点にしておいた。

(参考文献)

尾上圭介(一九九九)『大阪ことば学』 創元社

笠原伸夫(一九八九)『新潮日本文学アルバム7 谷崎潤一郎』 第六刷 新潮社(『アルバム』と略記)

河盛好蔵(一九六七)『谷崎文学と関西』(『谷崎潤一郎全集 月報十一』 中央公論社 所収)

河野多恵子（一九七六）『谷崎文学と肯定の欲望』 文芸春秋

坂部恵（一九九〇）『かたり』 弘文堂

瀬沼茂樹（一九六〇）『谷崎潤一郎入門』（『日本現代文学全集 四三 谷崎潤一郎集（一）』講談社 所収）

谷崎潤一郎（一九二八—一九三〇）『卍（まんじ）』（『改造』一九二八年三月号—一九二九年四月号、六月号—一〇月号、同年一二

月号—一九三〇年一月号、同年四月号、『谷崎潤一郎全集 第十一卷』中央公論社 一九八二年 所収）

——（一九三二）『私の見た大阪及び大阪人』（『谷崎潤一郎全集 第二十卷』中央公論社 一九八二年 所収）

——（二〇〇三）『卍（まんじ）』 第九九刷 新潮文庫

前田勇（一九四九）『大阪辯の研究』 朝日新聞社

——（一九六一）『大阪弁入門』 朝日新聞社

牧村史陽（編）（一九七九）『大阪ことば事典』 第二刷 講談社

最上勝也（一九九九）『ニュース報道の読み速さとその計測法』（『言語』九月号、四〇—四三頁 所収）

山下好孝（二〇〇四）『関西弁講義』 講談社

リービ英雄（二〇〇五）『日本語に魅せられて』（本テキストは談話にもとづいて編集部が構成したもの）（NHK知るを楽しむ

日本語なるほど塾』四・五月号、所収）

渡辺実（一九九六）『日本語概説』 岩波書店

「付記」本研究は文部科学省ハイテク・リサーチ・センター整備事業（平成一六年度～平成二〇年度）によるプロジェクト「関西圏の人間文化についての総合的研究—文化形成のモチベーション—」の研究成果の一部である。